

女性文學中的文化他者 -以山田詠美《做愛的眼神》之黑人意象為例-

陳美瑤*

中文摘要

自稱用生命愛男人，用靈魂寫小說的山田詠美以精準巧妙、時而辛辣的筆觸，將創作觸角從個人與個人之間的同／異性情慾性愛，延伸至校園霸凌與暴力、社會關懷，甚至種族歧視等廣泛社會議題。其中以黑人為性愛對象，刻劃女主角對黑人身體與心理之癡迷依戀的作品，屢屢引起文壇與媒體的喧嘩與騷動。本論文以山田詠美之處女作《做愛的眼神》為主要的文本分析對象，援用後殖民主義與性別研究的論述，透過深層的文本分析探討作品中被他者化之黑人在女性自我認同建構上所扮演的角色為何，並解析作品中日本女性刻意尋找黑人作為性伴侶之暗喻，進而爬梳其中潛藏之顛覆力量。

中文關鍵字:山田詠美、文化他者、性別研究、黑人表象、《做愛的眼神》

*文藻外語大學日本語文系副教授

The Cultural Other in Japanese Women's Literature: An Exemplary Discursive Analysis of Black Representation in Yamada Eimi's *Bedtime Eyes*

Mei-Yao Chen*

Abstract

Yamada Eimi, a novelist praised as “to love with life, to write with soul,” is known for her precise and pungent style of writing to depict social topics varying from homo/heterosexual desires between individuals, bullying and violence on campus, to racial discrimination. In particular, she textually engages black males as erotic objects to illustrate the female protagonist’s obsession with the body and mind of the black, repeatedly causing turmoil in the Japanese literary world. In light of Said’s post-colonial and Spivak’s post-colonial feminist perspectives, this paper critically examines Yamada’s *Bedtime Eyes* that involves representation of the black in order to scrutinize his symbolic function in the course of the female protagonist’s identity construction. Through probing into the metaphor of Japanese women who intentionally select the blacks as sexual partners, the hidden subversive power in Yamada’s work will be thereby unveiled.

Key Words: Yamada Eimi, the cultural Other, gender studies, discourse of black representation, *Bedtime Eyes*

* Associate Professor, Department of Japanese, Wenzao Ursuline University of Languages.

文化他者としての黒人 —山田詠美の『ベッドタイムアイズ』論—

陳美瑤*

要旨

身体で男を愛し、ソウルで小説を書く山田詠美は、鋭敏な自意識と他者への洞察力を持ちながら、露骨な性愛描写を通じてもっと自由な男女関係を再建するというテーマをはじめ、人種問題、性別問題を乗り越えた人間関係をいかに築くかという広い問題意識を作品に取り入れている。とりわけ、黒人男性との赤裸々の愛欲を綴る作品はしばしばマスコミでセンセーショナルに取り上げられ話題を呼んでいる。小論では、山田詠美のデビュー作『ベッドタイムアイズ』を中心に、ポストコロニアルやジェンダー研究の脱構築的な視点から作中における性愛言説と黒人男性の表象を分析しながら、女主人公の新たな主体が形成するメカニズムを明らかにすることを試みる。さらに、黒人表象のメタファーから山田詠美のテクストにおける転覆的なパワーをも解明しようとするものである。

キーワード：山田詠美、文化的他者、ジェンダー、黒人の表象、
『ベッドタイムアイズ』

* 文藻外語大学日本語学科副教授

文化的他者としての黒人 —山田詠美の『ベッドタイムアイズ』論—

陳美瑤

一、はじめに

「身体で男を愛し、ソウルで小説を書く」¹と自称する山田詠美は、鋭敏な自意識と他者への洞察力を持ちながら、露骨な性愛描写を通じてもっと自由な男女関係を再建するという命題によって、文壇において衝撃的なデビューを果たした。日本の女性作家の中で最も議論を呼んでいる「異色の作家」²と言われる山田詠美は、デビューした当時、作品の本質より、作家自身のホステス・ヌードモデル、元SM嬢などの経歴や、黒人男性と同棲中という私生活のほうが目され、マスコミによってセンセーショナルに取り上げられ、話題になった。

クラブ歌手の日本人女性キムと黒人脱走兵スプーンの赤裸々な愛欲の生活を綴ったデビュー作『ベッドタイムアイズ』(1985)は、黒人男性との肉欲に溺れる女主人公がそのまま作者の姿としてしばしば解される。山田自身は私生活を売り物にする私小説的作家ではないと位置付けていたが³、私小説家という先入観はその後長い間彼女に付きまとうことになる⁴。その後の作品は、次第に人種問題、性別問題を乗り越えた人間関係をいかに築くかという広い問題意識に拡大されていく。

¹ 山田詠美(2005)「あとがき」『ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー』幻冬舎文庫、p.203

² 田中実は、山田詠美について「他の作家とは扱い方、騒がれ方が違う異色の作家である。(中略)風俗的、フォーカス的ないかがわしい興味」であると読んでいる。「<他者>へ再び『蝶々の纏足』」『国文学論考』(1992) 28、pp.1-12

³ 藤堂志津子(1990)「解説「モノログ<エレガントな野生児>」」『カンヴァスの棺』新潮文庫、pp.158-166

⁴ 『ジェシーの背骨』(1986)や『トラッシュ』(1991)などの作品には作者の実体験が存在するのは否めないが、どちらも実体験によって書きたいという欲望に駆られて作り上げられたフィクションである。

デビューしてから三十五年が経過した現在、文壇における地位が確立されている山田詠美は、百以上の小説を書き、エッセイや対談集なども含め五〇冊以上の単行本を世に送り出してきた。その膨大な作品を大別すると、『ベッドタイムアイズ』をはじめ、女性の視野から大胆に黒人男性との性愛を描いたものと、『蝶々の纏足』(1987)や『風葬教室』(1988)が代表する少女または少年のデリケートで複雑な感性を凝視したものがあるが、その文学の根底に流れるのは人間同士の関係性というものである。とくに、男女の間の精神と肉体が分かちがたい性愛描写を通して現れる関係性には、作者の一貫した強い信念が潜んでいる。既存のロマンチックラブ・イデオロギーと断絶し、性愛から魂の愛に変わる新しい恋愛の在り方を描くことは、日本文学においては革命的な意味を持っていたと言えよう⁵。さらに、角田光代も、女性の意識を変え、女性という存在を解放させたのは一九八五年に制定された男女雇用機会均等法ではなく、山田の『ベッドタイムアイズ』であると指摘している⁶。

山田詠美を論じた文献はたくさんあるが、初期のスキャンダラスなイメージで偏見を持つ人々は完全にいなくなったとは言えないし、研究論文または本格的な作品論と言えるものもまだ少数である。とりわけ、ポストコロニアルやジェンダー研究からの視点で女性のアイデンティティの形成の問題に触れるのは、筆者の知る限りではわずかである。小論では、山田詠美のデビュー作『ベッドタイムアイズ』を中心に、脱構築的なアプローチから作品中の性愛言説と黒人男性の表象を分析しながら、女主人公がアイデンティティを構築する過程においてサイドのオリエンタリズムと類似した言説の位置を占めているかを解明し、文化的他者としての黒人主人公スプーンはサバルタンのように声が抑圧されたかを明らかにすることを試みる。

⁵ 楊偉(2007)「山田詠美の文学世界」『現代女性作家読本⑨山田詠美』鼎書房、p.12

⁶ 角田光代(2005)「山田詠美の小説を読むということ」『文藝』44(3)、pp.52-55

二、あらすじと先行研究

山田詠美のデビュー作『ベッドタイムアイズ』は1985年12月『文藝』に発表され文芸賞を受賞、芥川賞補作にもなり、1987年に映画化までされた。米駐留軍相手のクラブで歌手をしているキムは、ブラックタイにタキシードという場違いな格好のアメリカ黒人兵士ジョゼフ・ジョンソンに引き付けられる。目と目が合った瞬間、そのまま連れ出され、立ち入り禁止のボイラー室で激しい快樂の時を過ごす。いつも銀の匙を幸運のお守りにポケットに入れて持ち歩くことにより、仲間たちから「スプーン」というニックネームを付けられた彼は基地を逃走し、キムの部屋に転がり込み、二人の同棲生活を始める。その生活は性行為やアルコールやドラッグなどあらゆる欲望にまみれるものである。その一方で、キムは、スプーンにのり込んでいく自分を打ち消そうと、ほかの男ともセックスする。そして、ある日、キムは自分の人生の師匠のように慕うストリッパーのマリア姉さんにスプーンを寝取られたシーンを目撃する。キムを独占する形になったスプーンに嫉妬し、スプーンと関係を持ってしまったマリアは、キムへの長年の愛を告白する。生まれて初めて嫉妬というものを知るキムは、戻ってきたスプーンとやっと身も心も一つになれると思うが、スプーンが軍の機密書類を売ろうとして逮捕されてしまう。スプーンを失ったキムは茫然と部屋に座り込むところで物語が終わる。

『ベッドタイムアイズ』が単行本として出版されたとき、世間の反応は、作品内の性描写ばかりに注目が集まっていたが、文芸賞の選考委員の江藤淳は、「今年日本で書かれたすべての小説の中でも傑出し」た作品と言い、河野多恵子も「往年のリアリズムはもとより、感性や知性を認識手段とするだけでは捉えきれない未踏の真実を的確に生み出し、本当の新しさを示す」⁷と絶賛した。

文芸賞の選考委員による『ベッドタイムアイズ』への激賞に反し

⁷ 江藤淳・河野多恵子・小島信夫・野間宏（1985）「昭和60年代文芸賞受賞発表」『文藝』、pp.56-60

て、芥川賞の選評では、落選したのだから当然のことではあるが、否定的な意見が目立っている。田久保英夫は「肉体から心の愛に至る男女の物語は単純で、とくに斬新さはない」とバッサリ切り捨て、吉行淳之介は「終始、セックスを扱っていて汚くならず、良い素質が感じられた。ただ、バラツキのある作品で、新鮮なディテールとへんに理に落ちてつまらなくなるディテールとが混在している」と論難する。他の選考委員たちも山田詠美の「素質」や「才気」に一定の評価を与えるが、小説としての完成度に不満が残ったということとを口を揃えて語っている⁸。

大学在学中、本名山田双葉で漫画家として活躍していた経歴があったため、芥川賞選考委員会に先立つ山田詠美のメディア表象は、「現役女子大生のエロ漫画家」という存在にふさわしく、いかがわしくスキャンダラスなイメージに満ちたものであった。それにより、芥川賞の選考委員がセンセーショナルな写真や「SMの女王様」などのタイトルで報道した写真週刊誌『フォーカス』や『フライデー』に影響された可能性は排除できないだろう。山田詠美という新人作家の来歴に疑念を持つ選考委員は、芥川賞の「権威」ないしは「商品価値」を貶めないようにわざと山田詠美を忌避した可能性が大きいと、野中潤が指摘している⁹。芥川賞を与えられなかった太宰治が選考委員川端康成に抗議したように¹⁰、作家の私生活と生み出された作品は別物であるというのは、文学的な建前であるとしても、文芸賞と芥川賞の選評の評価の間に大きな差が生じた背景には、選考委員の構成の違いやそれぞれの好みのほかに、女性作家に対するよ

⁸ 吉行淳之介・田久保英夫ら(1986)「芥川賞選評」『文藝春秋』64(3)、pp.332-337

⁹ 野中潤(2011)「山田双葉と山田詠美」『高度成長の終焉と1980年代の文学』近代文学合同研究会

¹⁰ 太宰治は第一回芥川賞において、川端康成の「作家目下の生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾みあった」という言葉とともに落選した。その後、「文学賞が作品ではなく作家の生活態度の評価で決まってしまうのでしょうか？」とエッセイで川端に抗議した。

(https://www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/1607_13766.html 2020/08/28 閲覧)

り厳しい道徳観があったと考えるべきだろう。

作中のセックス描写ばかりに注目する偏見に対して、山田詠美は、「私はよくセックスを書くと言われているけれども、書きたいのはセックスじゃないのよね。本当はセックスをそんなに重要視していないんだよね。たぶん。セックスから生じているものを書きたくて、そのためのディテールとして使っているということが、たいていの人はわかってくれないので、それで大騒ぎとなる」¹¹と弁明している。つまり、山田詠美が描いたのは、欲望に自覚する女性が肉体と肉体がぶつかり合うという愛の形を通して、固定観念にとらわれない純粋な男女関係を築こうとするものである。

『ベッドタイムアイズ』の語り手キムが言葉よりも自身の身体感覚を重視している人物であることは、すでに多くの論者が指摘している。例えば、浅田彰は、山田詠美が「上っ面の言葉のレベルを超えて、身体のレベル」で「五感を総動員」した「生理的なコミュニケーション」によって男女関係を厳密に見つめる「モラリスト」と述べている¹²。また、川村湊に指摘される「これまで『精神』の側に属していると思われていたことを、『肉体』の側の言葉に翻訳してみせ、そうした『精神』と『肉体』、『心』と『体』の関係を逆転させてみようとした」¹³山田詠美の創作姿勢には、非常にシンプルで原始的な恋愛関係というモチーフが見られる。山田詠美がこういったモチーフで示そうとしたのは、「世間や社会のまなざしによって規定されるコミュニケーションから、身体的な関係を軸に自己責任でなされるコミュニケーションへのシフト」¹⁴という価値観である。

実は、山田詠美が小説家として活躍していく土台は、マンガの時代に形成されていたといえる。1970年代後半のマンガ世界では、性

¹¹ 山田詠美・吉本ばなな(1992)「<対談>恋愛小説のゆくえ」『文藝』31(5)、pp.154-179.

¹² 浅田彰(1996)「解説」『ベッドタイムアイズ・指の戯れ・ジェシーの背骨』新潮文庫、p.315

¹³ 川村湊(2015)「魂としての背骨」『川村湊自撰集』作品社、p.89

¹⁴ 南雄太(2007)「『ベッドタイムアイズ』—身体感覚と社会性—」『現代女性作家読本⑨山田詠美』原善編、鼎書房、p.21

は反権力、反体制のエネルギーとしてマンガに取り込まれ、原律子や内田春菊などの女性漫画家が、過激な性描写によって性や恋愛の幻想を解体したり、女性抑圧装置のあった時代をパロディー化したりしていた¹⁵。80年代頃のマンガでは、性的表現がさらにエスカレートし、過剰さを増していた。それゆえ、山田が最後のコミック『シュガーバー』（1981）で使った「体がとろけたバターになりそう」や「男のペニスは私の好きなシュガーバー」などの吹き出しをそのまま『ベッドタイムアイズ』で使ったところ、作者自身が想定しなかった過剰な反応を受けて驚いたようである¹⁶。活字によって表現される小説は、漫画よりも読者自身にイメージを喚起させる力が強いだけ衝撃が大きいのだろう。それに、文学においては、女性作家がそれまで男性作家が堪能する性描写を露骨に描くことや、性的に受け身だった女性を男から得られる快楽を満喫する積極的な性的な欲望の持ち主に転換することは、何より男性読者に恐怖と脅威を感じさせるだろう。

当時、『ベッドタイムアイズ』を称賛する批評家は文章や主題性に理解を見せたものの、キムという新しい女性像の正当な評価はなし得なかった。例えば、選評で最大級の賛辞を贈っている江藤淳は、戦後批判論客という自身の政治的な立場をふまえて、山田詠美は「男性は去勢」「女性は娼婦」という自身の認識に一致すると評価するが、そうした理解ではキムの「主体の位置」の問題やアイデンティティ形成のプロセスを通して作者が体現したいものを読みそこなう可能性があるだろう。

また、竹田青嗣は表面的には、『ベッドタイムアイズ』の技法の斬新性を称賛するが、この作品は「ひとりの女が男に“首ったけ”になること。ただそれだけだ」とし、さらに、「山田詠美は自分自身の経験を掘り出すかのように、よく知っていることしか書かないのだ」

¹⁵ 執拗と言えるほど性的話題にのめり込んでいる原律子は、山田詠美の明治大学漫研の先輩であり、山田にかなりの影響を与えたと考えられる。

¹⁶ 山田詠美・小島信夫（1987）「特別対談 『性』を視座として」『文学界』41（7）、p.210

と述べている¹⁷。竹田の解説はテキストの範囲内に留まっておりながら、男性は単なる経験を超越してより高度な芸術を創造することができるのに反して、女性は経験によってしか書けないということを暗示するように、山田の作品を過小評価するきらいがある。村上龍も、山田詠美の足を見た時、「彼女の柔らかく滑らかで明るい珈琲色の肌はあらゆる思考、言語、落ち着き、モラルを寄せ付けない、その肌の輪郭が作り出す生の力は誘惑的で神秘的な曲線を描き出す」¹⁸と語り、女性作家の作品はその作者自身の身体とは分かちがたい関連性を有していると述べているようである。このように、テキストの範囲内に留まる読み方や、新鮮でセクシーな作者自身の身体／経験が再現していることを称賛することでは、山田詠美の作品が持っている転覆的な力を解説する事は出来ないだろう。

有色人種の男性、とりわけ黒人男性を好む登場人物／語り手を好む傾向がある山田詠美は、『ベッドタイムアイズ』が一番ひんしゆくを買う原因は、恋愛の相手が黒人男性で、そしてその相手との性交渉を描写することだと思っている¹⁹。この作品は無抵抗に従来通りの黒人ステロタイプを使っているのではないかとよく曲解されるが、作者自身はアフロアメリカン対日本人の構図を描こうとする意図は一切なく、ただ「性的な結びつきを持ってから心の領域に足を踏み入れる」、ある「特定の男女」²⁰の恋愛を綴っているにすぎないと述べている。しかしながら、アイデンティティは、主体の位置、そして「ホーム」の社会的政治的なベクトルによって克明に刻印されているものであるため、作者やその主人公のアイデンティティも単純に個人的ではありえない。黒人男性としか成就できない新しい形の恋愛を通して形成される彼女のアイデンティティには、「日本」という「国家／社会」に対する欲望は存在するだろう。それゆえ、作品中で「他者化」されている黒人男性を超国家的な枠組みから、そし

¹⁷ 竹田青嗣(1987)「解説」『ベッドタイムアイズ』河出書房、pp.144-158

¹⁸ 村上龍(1987)「解説」『ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー』角川書店、p.219

¹⁹ 山田詠美(2002)「得意技を持つ人々」『Amy Says』新潮文庫、p.35

²⁰ 山田詠美(2002)「親しき仲には」『Amy Says』新潮文庫、pp.23-30

て女主人公の新たな主体形成のメカニズムから見てみるのは、山田詠美の転覆的な作品を解説する上で有意義だと思われる。

三、文化的他者としての黒人

他者という概念は、広義においては自己と切り離された他人という意味を持つものであるが、ポストコロニアリズムの理論における他者は、近代西洋の東洋に対する植民地的支配を象徴する「オリエンタリズム」という概念から生み出されたものである。エドワード・サイードの定義によると、オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するための、西洋が優越的な存在としての自己を認識するメカニズムである²¹。つまり、それは近代ヨーロッパが西洋／東洋という二項対立のもと、「東洋」を自己とは正反対の「他者」として描くことによって描いた自画像である。そこでは「東洋」は、合理的、科学的、能動的、発展的という西洋の自己認識とは正反対の、非理性的、感覚的、受動的、停滞的などといったイメージが付加されてきた。ここにジェンダーの視点を加えれば、それらの属性が女性に割り当てられたステレオタイプに共通するものが見られる。つまり、西洋男性による文学や絵画に描き出された東洋のエキゾチシズムは常に女性のエロティシズムを媒介として表現され、西洋から東洋、男性から女性へという複合的な差異化が同時に働いている。西洋／男性にとって、東洋／女性が陰画的な存在でありながら、常に欲望を充足させるための存在でもある。

オリエントの一員として、ネガティブな要素を背負わされた日本は、日露戦争の勝利やアジア諸国への植民侵略によって、いったん軌道修正がなされるものの、結局、西洋とは相いれないイメージが形成されていった。言い換えれば、近代日本は、西洋(支配者)からオリエンタルなもの(被支配者)として観られる一方、支配者としてアジア諸国(被支配者)を観る二律背反構造に基づき、日本がアジアに対して向けるまなざしは西洋が東洋に向けたもののようにストレートで一方的なものではなく、西洋のオリエント憧憬を内

²¹ Edward Said (1978) *Orientalism*, New York: Georges Borchardt Inc. (=1993. 今沢紀子訳『オリエンタリズム 上』平凡社、pp.118-119

在化したアンビヴァレンスで複雑な視線となっている²²。「先進的な西洋への同一化と同時に後進的な東洋との差異化は、日本が自らを近代的な『自己』として確立するうえで不可欠な条件であった」²³といえるものの、近代日本は、オリエンタリズムというメカニズムそのものを内面化し、東洋でも西洋でもない越境的な、そして矛盾する「キメラ(複数の合成生物)としての自己像」を結んできたといえるだろう²⁴。

こういった近代日本の歴史文脈から読めば、『ベッドタイムアイズ』における日本人女性とアフリカンアメリカ人男性の間に存在する権力構造は、国家、人種、文化、ジェンダーなど様々な要素が絡み合っている複雑なものだといえよう。冒頭の部分を引用してみると、

スプーンは私をかわいがるのがとてもうまい。ただし、それは私の体を、であって、心では決して、ない。私もスプーンに抱かれる事は出来るのに抱いてあげる事が出来ない。何度も試みたにもかかわらず。他の人は、どのようにして、この隙間を埋めているのか私は知りたかった。マリア姉さんに聞いても具体的には教えてくれない。いっそこうしろと誰かに命令された方がよかった。意志を持たない操り人形が示された処方箋を読むように私はスプーンの痛むところを舐めまわしたい。それが彼のディックを舐めまわすより、はるかに困難だということに気づくまでに時間がかかり過ぎた。何故、もっと早くから練習しておかなかったのか、と思う²⁵。(9)

この小説の作品内時間は、スプーンを喪失するに至る結末から冒頭へと接続している。まず、このシンプルにして典雅な文章によって書かれる冒頭の、性と人種の二重の衝撃的な表現は、それまでの恋愛に関する

²² メータセート・ナムティップ(2018)「タイにおける日本文学を受容：芥川文学の事例を中心に」『立命館言語文化研究』21(3)、p.119

²³ 阿部潔(2001)『彷徨えるナショナリズム—オリエンタリズム／ジャパン／グローバリゼーション』山川出版社、p.78

²⁴ 太田健二(2016)「オリエンタリズムと〈日本(人)〉イメージ再考—『クールジャパン』というポピュラー音楽の表象を事例に一」『四天王寺大学紀要』61、p.46

²⁵ 本文の引用は『ベッドタイムアイズ・指の戯れ・ジェシーの背骨』(1996、新潮文庫)に拠った。

女性文学には見られなかった斬新さがあると言える。最初から最後まで本文の所々にちりばめられたディック、コック、ペニス、スリット、プッシーなどの性器表現や、女性の能動的な性的な欲望表現が露骨で刺激的なのである。それに、物語の最初から、「私」とスプーンとの不平等な、非対称性を持つ関係が体现されておりながら、日本人女性から見た外国人、特にくっきりとした差異として現れてくる黒人の本質的な魅力と恐怖も読者に伝わっていると見えよう。気まぐれでしばしば過激な導入から愛情に発展するこの欲望の物語において、「私」もスプーンも互いの「心」に触れる方法を知らないが、フィジカルな身体交渉を超えた相互交渉の方法を模索している焦りと挫折感が感じられる。

この引用に続く場面では、最初に出会った時、交差した視線に誘導され、立ち入り禁止のボイラー室に身を滑り込ませる二人の慌ただしい初めての情事が描かれている。

私は唇に力を込めてその胸毛をひっぱりながら男の体臭を味わう。そして、これと同じ匂いを嗅いだ事がある、と思う。ココアバターのような甘く腐った香り。脇の下からも不思議な匂いがする。腐臭に近い、けれども決して不快ではなく、いや不快なのではなく、汚いものに私が犯される事によって私自身が澄んだものだと気づかされるような、そんな匂い。彼の匂いは私に優越感を抱かせる。発情期の雄が雌を呼び寄せるムスクはたぶんこんなふうに懐かしさを感じさせるのだ。(12-13)

視覚は、他者を最初に居るがままに認識する感覚である。五感を総動員したこの小説において、二人は最初に視覚を介在して互いの身体や容姿に惹かれ、動物的ともいえるような性交渉を始めたが、「私」の性的な欲望はさらに嗅覚によって掻き立てられていく。溜息だけで会話していた情事が終わったら、「名前を教えて」「スプーン」と、二人が初めて言葉を交わすのである。

スプーンに関する表象には、「腐臭に近い」(12)、「育ちの悪い大馬鹿」(67)、「黒い魔物」(45)、「大きな凶体をした未熟な子供」(45)、「やはりニューヨークのハーレム育ち、ドラッグスとは共存関係にあるらしく」(27)などが見られる。また、安物のジンとアブサンをあおって帰ったスプーンに向かって、

「私」は「ハーレムの匂いだよ！劣等感の塊の臭い匂いがするんだ！」(41)「あなたって最低の男だよ！アル中でジャンキーで。あたしだってみっともなしの日本人なんだ。だけどあんたよりましだわ。黒人て汚い。だから生まれつき不幸なんだ！」(42-43)という決定的な言葉を投げつける。それゆえ、『ベッドタイムアイズ』における偏見に満ちている黒人像は、それまで日本人が抱くマイナスのイメージを助長しかねないという指摘もあれば²⁶、山田詠美の作品に描かれた黒人像はかなりステレオタイプ化された存在になっているという批判も受けている²⁷。

文化人類学者であるジョン・G・ラッセルは、現代日本文学に登場する黒人像には、「幼兒的」「原始的」「性欲が強い」「動物的」「生まれつき運動が得意」「知能が低い」「精神的に弱い」「精神的不安定」など八つの特徴があると指摘し、それを差別的な表現だと批判している²⁸。例えば、遠藤周作の『黒んぼ』(1971)や大江健三郎之『飼育』(1958)では、黒人の身体的な差異が強調され、西洋文学や文化が伝わってきた黒人ステレオタイプをそのまま受け継ぎながら、文明的な西洋と野蛮的な黒人の合間に日本人的主体位置を模索する。

確かに、無限の精力、暴力癖とアルコール癖、独特の体臭、理性的思考と明確な発話の困難などの典型的黒人像だけに注目すれば、リチャード・オカダが述べるように、『ベッドタイムアイズ』における日本人である「私」はサイドのオリエンタリズムの学者と類似した言説の位置を占めている²⁹。また、純白が汚されれば逆に聖化される古典的な女性神話のように、腐臭を始め、スプーンのネガティブなイメージは「私」に優越感を抱かせたり、「私」がスプーンの知的水準や教育程度を低く見たりするのも確かなことである。「私」の優越意識は、かつて男が女に抱いた優越意識の転倒ともとれるし、

²⁶ 佐藤愛(2001)「黒人とチョコレート—山田詠美『ベッドタイムアイズ』論—」『芸術至上主義』27、pp.124-130

²⁷ デッド・グーセン(1994)「『他者』の世界に入るとき—山田詠美と村上龍の外人物話をめぐって」『日本文学における<他者>』新曜社、pp.398-431

²⁸ John G. Russel (1991) "Race and Reflexivity: The Black Other in Contemporary Japanese Mass Media," *Cultural Anthropology*: 6(1), pp.416-428.

²⁹ Richard Okada (1997)「主体をグローバルに位置づける：山田詠美を読む」大野雅子訳『日米女性ジャーナル』21、pp.79-95

あるいは、白人が黒人に抱いてきた優越意識に似たものが潜んでいると言われている³⁰。しかしながら、「私」とスプーンの間にある力関係はこういった固定した二項対立の上下関係に回収されるものではない。実は、黒人登場人物を類型的ではないロマンチックな恋人に変貌させることによって、「私」の目を通した黒人表象は既存の黒人ステレオタイプを徐々に変貌させ、脱構築されていくのである。

自称「大胆不敵な不良少女」の「私」は、嘲罵できる黒人男性と関係を持つことで優越感を得るが、実際には臆病でいつも絶対的な指導者を必要とするものである。「私」は、好物のチョコレートバーと錯覚するような、スプーンの圧倒的な存在感を持つディックにこだわりを持ち、「メイクラブ」の「天才」であるスプーンの性愛技術に「甘い敗北感」を味わいながら、常にスプーンの下に位置する存在である。

彼は実際にそうなのだが、何に関しても熟練者のように振る舞った。私は自分を幼い者のように感じ可愛く思った。I'm gonna be your teacher. (オレは、お前に教えてやるよ。)この言葉を私は何と頼もしく聞いたことか。(28)

私は無言で抵抗するように見せかけて、スプーンの気をそそった。(中略)私はその時、不貞腐れたように無気力だった。けれど、それがポーズである事を彼にわからせたくて、私は彼の首に手をまわし引き寄せ、耳朶を噛んだ。彼の目は、そんな事は先刻承知さと言いた気だった。まったく彼は私の教育者たる地位を築き始めていた。(30-31)

スプーンの身体と性への耽溺が尋常の域を超えた過激なもののように見えるが、自己嫌悪に陥りがちだった「私」は、愛する男を「頼もしく」思えば思うほど自分を「可愛く」「幼いもののように感じ」たくなる。つまり、スプーンの身体と性への優位性を受け入れることによって、次第に「私」の自己意識が築かれていく。暗喩的には、「白人」と「日本人」のそれに対して、絶対的な優位性を持つスプーンの

³⁰ 長谷川啓 (2009) 「ベッドタイムアイズ・山田詠美」『ジェンダーで読む愛・性・家族』東京堂出版、p.68

デシックは権力の超越的なシニフィエ(transcendental signifier of power)と見立てることが出来るため、黒人男性のファルスを所有、操縦することにより、「私」は権力を与えられるのである。

また、「私」を魅了させるのはスプーンの身体と性だけでなく、彼の音楽的に聞こえる四文字言葉も自らを征服させるに値する優位性を有する。

彼の^{フォーレターズワーズ}四文字言葉は極めて音楽的に聞こえる。その入っていない優等生英語は今の私にとっては不能の男の飲む気の抜けたビールのような代物だった。彼が私を^{あぼずれ}bitchと呼ぶとき、私は親愛なる同士を見るように感じる。スプーンはビッチの男なのだという根拠において。(26)

既存の観念においては、「優等生英語」を操る男性は知性的だと見なされるが、「私」にとってはかえって「不能の男」であることから見れば、制度された言説の枠にはめられないスプーンの「四文字言葉」は野性的な美に満ち、野卑な性の優位性が示唆されている。

そもそも、「自分の目の前あるものだけを愛する」「私」は、観念的なものを拒否する者であり、スプーンの「中毒者」になるにつれて、「彼のためにアル中の売春婦にだって身をやつすかもしれない」(35)と言って憚らない姿は、家父長的社会が称賛する良妻賢母などの理想的な女性像の対極に位置する存在を示す。同様に、黒人という人種の西洋における社会地位はともかく、基地から脱走したスプーンも国家の法律から逸脱するマイノリティーである。国家、社会のヘゲモニーから疎外されるマイノリティー同士は互いに引き付けられ、制度や規範に束縛されない自由を求め、同じ生／性を分かち合う自然な関係性を作るのである。

「体」が「言葉」に優先するスプーンは、観念的、抽象的なものとは対極にある肉体の衝動に即して行動するが、常に度を越してマゾヒズムへの嗜好性を見せる。

彼は私の皮膚が剥がれてしまうくらいに強く、私の首筋を吸った。そこには、かわいそうな紫色の蜘蛛の巣が散乱する。その蜘蛛

蛛は彼の心を捕食しようと待ち受ける。けれど、いつのまにか私は、そんな大それた考えを捨て、スプーンの小さなおもち^トや^イになることを楽しみ始める。トイは気まぐれなキッズにたたきつけられ、もてあそばれるうちに、その痛みを楽しみ始める。(34)

受動的かつ積極的で、時にはマゾヒスティックな行動をとる「私」は、一見、ヘテロセクシャルの狭義の性行為における受動的、被虐的なものに類似した女の性的快楽を味わうが、実は自分に主導権や支配権があることを十分意識している。つまり、「私」の「スプーンに自分自身を征服させた快楽を知る」という認識は、スプーンが与える心身両面の痛みを快楽に変容させるのができる。スプーンとの交わりの後に「ベッドの横の鏡に目をや」って自分の姿を確認する「私」は、演技の対象である同時に能動的な演技者でもある。

白いシーツを私はつかみ、幾重にも重なった皺の上に私の体はある。それは、ただのぼやけたフォトグラフに見える。その上に私のもう一枚のいとしい黒いシーツが載せられ、タイトな写真が現像される。私はやがてそのシーツの白さも黒さも識別できなくなり、朦朧とした意識の中で自分の指先の赤いエナメルだけを追っている。(38)

ラカンが提唱した「鏡像段階」概念のように³¹、「私」は鏡に映る自分の姿を見ながら自己の意識が芽生えていく。そして、肉体もろとも他者なるものの中に身を浸した「私」は、相互浸透を通して他者を自己の中に組み込み、他者との同一性を獲得する。

『ベッドタイムアイズ』において、スプーンは言葉による表現力は与えられておらず、表現される対象ではあっても決して表現する主体ではないと指摘されている³²。しかし、有田和臣は、小林秀雄が提出した、肉体は精神の動きと密着連動しつつ、表現手段としての「言葉」をもその運動と直結運動するものという批評を下敷きにし『ベッドタイムアイズ』を分析し、スプーンと「私」

³¹ 福原泰平(1998)『ラカン—鏡像段階』講談社

³² リービ英雄(1991)「日本語の勝利 平成の渡来人」『中央公論』(105)1、pp.314-324

との「肉体」も自己表現の「言葉」と結ばれていると指摘している³³。精神が肉体と連動する「言葉／表現」、あるいは、知性や思考の代わりに、身体という直接的なものから発せられるスプーンの「言葉」は、観念的把握から逃れるものであるこそ、より人間のリアルな様態に肉薄する事が出来るということである。また、脱構築論からスプーンという人物像を見れば、オルターナティブな解釈ができると思われる。スピヴァック『文化としての他者』における論考によれば、言葉が常に暴力性と偏向性を孕んでいること、言わばある種の「刃」だということである。何らかの「文化」を「説明」するとき、その説明自体が文化に拘束されていることを見失いがちである³⁴。従って、スプーンという「他者」に「私」の言葉／日本語で表現させることより、野性の満ちている四文字言葉やボディランゲージのほうが「言葉」表現そのものの暴力性や偏向性を軽減する事が出来ると言えよう。冒頭で「私」が詮索していた他者の「心」を抱く方法は、まさにこういった肉体と連動してこそ存在する「言葉」を介して他者とかがわるしかできない。

スプーンは暴力、アルコール、薬の乱用などによる武装を解除し、初めて「私」の前で涙を見せたり、欲望という知的な言葉や暖かい言葉を聞かせるのは、彼らが一緒にいられる最後の瞬間である。一人称の「私」の語りや目を通して、自己喪失に苦しんだり、深い絶望感に打ちのめされた感じやすい内面を持つスプーンは、「案外、頭はよかったかもしれない」(96)、というユニークで複雑な人柄が徐々に浮かび上がる。そして、最初の黒人ステレオタイプも自然に脱構築されていく。ポストコロニアル的な二項対立の構図から逸脱したスプーンは、声が抑圧されるとはいえず、言葉よりボディランゲージによる雄弁に語っているだろう。

四、「私」のアイデンティティの形成

スプーンと出会うまでに、「私」はストリップダンサーであるマリア姉さんを「テキストブック」と崇拝し、彼女のアートにもなりう

³³ 有田和臣 (2008) 『『ベッドタイムアイズ』における小説言語の獲得—山田詠美・小林秀雄の〈肉体〉と〈言葉〉』『稿本近代文学』33、pp.135-151

³⁴ ガヤトリ・C. スピヴァック (2000), Gayatri Chakravorty Spivak (原著), 鈴木聡ら訳、『文化としての他者』復刊版、紀伊國屋書店

る肉体の表現力に劣等感を持つ。「人を欲情させるような淫靡な空間を作れる」(18) マリア姉さんのプッシィを見る度に、「私」はその存在感に圧倒される。従って、数多くの男たちとの「お遊び」の中で真実な愛を感じ取りそうになったときは、必ず彼女に「ひとりじゃこわいの」「一緒に愛して」と懇願し、相手の男性とセックスして「確認」してもらい、そして「安心感を持って男を愛し安らぎを得、自分を不具者のように感じ」(21)るのである。

ところが、スプーンの場合になると、「私」はマリア姉さんの「おかしなカウンセラー」を想像しただけで今まで抱いたことのない強烈な嫉妬に泣きそうになる。

想像は出来た。スプーンが私の体にするようにほかの女の体に噛み跡をつける事など、を。その瞬間、私の頬を生暖かい液体が伝わり落ちた。私は茫然自失して泣いていた。(21)

この作品のクライマックスと言われる所は、マリア姉さんがスプーンとベッドに寝ているところを「私」に見つけられた時、「私」に向かって愛を告白するシーンである。おかしなカウンセリングによって結ばれたマリア姉さんとの潜在的レズビアン関係は結局実らず、「私」はスプーンの何物にも代えがたい存在を強く認識させられたのである。秋田公男が指摘したように、マリア姉さんの役割は嫉妬を通じて無自覚であったスプーンへの愛の深さを自覚せしめることである³⁵。そして、初めてマリアを「『あんた』という対等の呼び名」(60)で呼び、初めて「所有」意識を持った事に気付く「私」は、スプーンと「何百回と繰り返したファックの中で生まれて初めて体だけでなく言葉を使った対話」(70)をする。

マリア姉さんとスプーンの情事をきっかけに「私」とスプーンの関係が「濃度の濃いものに変化」(68)していくが、それは、「私」はバイセクシュアルのマリアとの同性愛から「卒業」し、異性愛という他者との関係へと転向したことを示す。女性同士の絆が父権的

³⁵ 秋田公男 (2005) 「『ベッドタイムアイズ』—性の原質」『近代文学—性の位相』翰林書房、p.242

な異性愛の言説を覆すことではなく、ジェラシーという決定的な要素を導き出すに留まるのは、異性愛を支配的なものとして特権化するように見えるが、他方で女性の交換と交易を対象化する父権言説におけるパターンの逆として読むことの可能性が指摘されている³⁶。すると、交換の対象として、スプーンがマイノリティーの男性であるということが極めて重要な意味を帯びている。

有田和臣が指摘したように、マリア姉さんとスプーンと「私」の三人は、観念的なもの、抽象的なものに対する一貫した否定の姿勢と、肉体的なもののみを信じるという共通性を帯びている³⁷。また、同様にキリスト聖者の名前を持っているマリアと本名がジョゼフ・ジョンソンであるスプーンは、「私」にとって成長するための絶対的な指導者のような存在である。マリア姉さんから「あんたを捻じり潰してバリバリと骨まで食べてしまったかもしれない」(64)という愛の告白も、「私」がスプーンのペニスを「スプーンでバナナのようにくり貫いて食べてしまいたい」(70)という気持ちと同質なものである。泣くという事も愛するという事も屈辱だとマリアの発言も、スプーンにのめり込んでいく「私」の「甘い敗北感」を彷彿とさせる。

ところが、目に見えるものしか見ないし、目の前にないものはないと同然だと信じている自称「記憶喪失の天才」(98)である「私」は、スプーンとマリア姉さんとの浮気をきっかけに変化しはじめた。具体のここのみ、肉体のみ信じていた「私」は、スプーンの「不在」時にどんなに彼を欲しかったかを言葉で訴え、スプーンが幼い頃「何も言わずに勝手に死んだ猫」(71)の記憶のようにスプーンの記憶の中に刻印しようと切望する。しかし、身体的な直接交渉で得られた体験を超えたこの言葉／記憶は、具体的肉体的なものとは直結されたものであるため、観念的なものへの回帰でない独自性を持っている

³⁶ Richard Okada (1997)「主体をグローバルに位置づける：山田詠美を読む」大野雅子訳『日米女性ジャーナル』21、p.86

³⁷ 有田和臣(2008)「山田詠美『ベッドタイムアイズ』—〈肉体の言葉〉から〈思い出の言葉〉への探求路」『国文学：解釈と鑑賞』73(4)、p.161

る³⁸。例えば、スプーンとの別れの間際に、「不謹慎」ながら「私」の脳裏に想起されるはしたないディナーは、鮮烈な五感を総動員した官能的光景である。

食べる最中にナプキンなど使わないのでリブをつかんだ彼の指の爪は、皮の付いたままの栗の実のようにつやつやになる。私が一本目を食べ終わる頃にスプーンは残り全部を平らげてしまうので、私は少しも満足できない。まだ、とってもおなかがすいてるの。しゃぶらせて。私はソースの付いた彼の指を一本一本、口に入れながら彼の顔を見る。スプーンは、きっとその時、私とやりたいたいと思っている。そういう顔をしている。それからどうするの、スプーン。(87-88)

欲望に正直で食欲な二人の食の光景もベッドシーンも、同様に官能に直結しており、同じ内実を持ちながら人間の最も基本的かつ日常的な行為としてとらえられ、リアルな様態に肉薄している。二人は互いの身体と心を食い尽くし合うことにより、互いの身体と心に刻印される。スプーンが逮捕されたあと、一人部屋に残された「私」は、「気が狂ったように部屋中をひっくり返してスプーンの残して行った形跡を探し始めた」(97)が、「匂い」に触発され正気に戻る。スプーンを失って初めて自らの内部に新しく生じた記憶という所有物に気付くのである。

そして、スプーンとの美味しい記憶の数々には、「あの恥知らずの黒い手」(98)、「自分の手を挟み込んで離さない」(98) 弾力ある尻の「スリット」など、肉体重視の側面に限られるものである。物語の終わりで、「初めて私自身に持ち物を得た」(98)と繰り返し言う「私」は、記憶を獲得したことによって目の前の具体、つまりスプーンの肉体にのみ執着する段階をすでに超えている。

私は思い出をいとおしんでいる！思い出という言葉が！私にはまったく関係のなかった意味のない言葉。私は記憶喪失の天才で

³⁸ 前掲論文、p.165

あったはずなのに。初めて私自身に所有物が出来てしまったのだ。私の中にまだ彼の体液は残っているだろうか。私は望んでいる。それらが私の細胞のひとつひとつに染み込んで、あの良い匂いを放つ事を。私は抵抗を諦めて流れに身を任せる。次第に記憶は沈殿して私の中で上澄みになる。まるで何事も起こらなかったただの水に見える。人々は知らない。私は誰にも気づかれないように時折、そっと、下に溜まったクリームを指ですくって舐める。そのとき、初めて私は優越感を感じ、声を出す。「美味しい」と。(98)

「自分を劣等生のように感じ」(61) ていた「私」には「思い出という言葉」によって不在者を現前させる力を持てるようになったため、優越感を感じるのである。皮肉なことに、最初にはスプーンの優位性を持つ肉体を所有、操縦することによってパワーをもらった「私」の優越感は、スプーンを失うことでさらに進化していく。不在になったスプーンは「私の体内に棲みついた野獣」(92) となり、「私」に染み込み始める。「甘く疲れた体をベッドに運び、私はブランケットをめくる。そこに鋭いあの目たちが潜んでいる錯覚から抜け出すことは、もう、出来ない」(99)。視線の交叉に始まった愛の物語は「見る」ことのうちに終わりを迎える。

見る主体としての「私」は、文化的他者としてのスプーンの心をいわば「鏡」として、そこに自分のイメージを映し、それを通じてアイデンティティを形成していくのである。言い換えれば、異なる他者が力を持って自分の前に立ち現れ、その他者を心身ともに抱え込むことにより、「私」はそれまで隠された自己の内なる無意識を他者に結びつけるエネルギーの出口を見つけた。従って、文化的他者としてスプーンは、ポストコロニアル的な「他者」としての対立、二項対立的な要素で定義しかねる両義的存在でありながら、ナルシストの「私」にとっても自分が存在するアイデンティティを構築するための「装置」としての役割を果たしているといえよう。そして、疎外感、不安、不確実性を抱えた「私」は、同一性、同一化にこだわる日本という国家／社会の言説によらない新しいアイデンティティの可能性を開いた。

五、おわりに

『ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー』のあとがきで、「日本語を綺麗に扱える」³⁹世の中でたった一人の黒人女と自称する山田詠美は、肉体と心の素晴らしい合一モデルを体現できる黒人文化を心底から愛するだろう。それゆえ、欲望に自覚する女性が肉体と肉体がぶつかり合うという愛の形を通して、固定観念にとらわれない純粋な男女関係を築こうとするとき、黒人男性よりふさわしい相手はいない。山田詠美自身の黒人女としてのアイデンティティ、そして、『ベッドタイムアイズ』におけるオリエンタリズムと類似した言説の位置を占めると思われる女主人公キムには、文学的帝国主義の暴力が潜んでいるのではないかとよく指摘される。

しかしながら、他者との交渉がセックスを通してスピリチュアルな成長に至るにつれて、ステレオタイプに見える黒人像はポストコロニアル的な「他者」としての対立、二項対立的な要素で定義しかねる両義的存在になり、次第に脱構築されていく。様々な背景により制度や規範から疎外されてきた「私」は、スプーンに言葉や意味に自分のすべての根拠を置くことを拒否するという共通点を見出し、精神の対極にある肉体的交渉で得た独自の言葉／記憶を獲得する。すなわち、他者の世界に自分を溶け込ませる「私」が手に入れたのは、文化的他者という存在に対する所有欲や支配権ではなく、自己目的的な価値を持つ言葉により記憶を語る力である。

そして、こういった米軍の黒人兵士としか成就できない恋愛を通して形成される「私」のアイデンティティには、肉体の内部にある無意識のパワーを秘めている黒人を象徴機能として、常に女性の快楽を抑圧、制限する日本の男根支配的な言説へ脅威を与えながら、女性の能動的なセクシュアリティを体現しようとする欲望をとらえる事が出来る。それゆえ、山田詠美の転覆的なテキストは、女性の意識を変え、女性という存在を解放させた存在であると言えよう。

³⁹ 山田詠美 (2005)「あとがき」『ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー』幻冬舎文庫、p.203

参考文献

- 秋田公男（2005）「『ベッドタイムアイズ』一性の原質」『近代文学性の位相』翰林書房、pp.236-252
- 浅田彰（1996）「解説」『ベッドタイムアイズ・指の戯れ・ジェシーの背骨』新潮文庫、pp.315-322
- 阿部潔（2001）『彷徨えるナショナリズム—オリエンタリズム／ジャパン／グローバリゼーション』山川出版社
- 有田和臣（2008）「『ベッドタイムアイズ』における小説言語の獲得—山田詠美・小林秀雄の（肉体＞と＜言葉＞）」『稿本近代文学』33、pp.135-151
- 有田和臣（2008）「山田詠美『ベッドタイムアイズ』—＜肉体の言葉＞から＜思い出の言葉＞への探求路」『国文学：解釈と鑑賞』7（4）、pp.160-165
- 江藤淳・河野多恵子・小島信夫・野間宏（1985）「昭和60年代文芸賞受賞発表」『文藝』、pp.56-60
- 太田健二（2016）「オリエンタリズムと＜日本（人）＞イメージ再考—『クールジャパン』というポピュラー音楽の表象を事例に—」『四天王寺大学紀要』61、pp.41-56
- 角田光代（2005）「山田詠美の小説を読むということ」『文藝』44（3）、pp.52-55
- ガヤトリ・C. スピヴァック（2000）, Gayatri Chakravorty Spivak（原著）, 鈴木聡ら訳、『文化としての他者』復刊版、紀伊國屋書店
- 川村湊（2015）「魂としての背骨」『川村湊自撰集』作品社、pp.89-94
- 佐藤愛（2001）「黒人とチョコレート—山田詠美『ベッドタイムアイズ』論—」『芸術至上主義』27、pp.124-130
- 竹田青嗣（1987）「解説」『ベッドタイムアイズ』河出書房、pp.144-158
- 太宰治（1981）底本「川端康成へ」「もの思う葦」新潮文庫、新潮社 (https://www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/1607_13766.html)

2020/08/28 閲覧)

- デッド・ゲーセン (1994) 「『他者』の世界に入るとき—山田詠美と村上龍の
外人物語をめぐる—」『日本文学における<他者>』新曜社、pp.398-
431
- 田中実 (1992) 「<他者>へ再び—『蝶々の纏足』—」『国文学論考』
(1992) 28、pp.1-12
- 藤堂志津子 (1990) 「解説「モノローグ<エレガントな野生児>」
『カンヴァスの棺』新潮文庫、pp.158-166
- 野中潤 (2011) 「山田双葉と山田詠美」『高度成長の終焉と1980年代の文
学』近代文学合同研究会
- 長谷川啓 (2009) 『ジェンダーで読む愛・性・家族』東京堂出版
- 福原泰平 (1998) 『ラカン—鏡像段階』講談社
- 南雄太 (2007) 「『ベッドタイムアイズ』—身体感覚と社会性—」
『現代女性作家読本⑨山田詠美』原善編、鼎書房、pp.18-21
- 村上龍 (1987) 「解説」『ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリ
ー』角川書店
- メータセート・ナムティップ (2018) 「タイにおける日本文学の受
容: 芥川文学の事例を中心に」『立命館言語文化研究』21 (3)、
pp.113-129
- 山田詠美・小島信夫 (1987) 「特別対談 『性』を視座として」『文
学界』41 (7)、pp.208-233
- 山田詠美・吉本ばなな (1992) 「<対談>恋愛小説のゆくえ」『文
藝』31 (5)、pp.154-179
- 山田詠美 (1996) 『ベッドタイムアイズ・指の戯れ・ジェシーの背骨』
新潮文庫
- 山田詠美 (1998) 『メンアットワーク 山田詠美対談集』幻冬社
- 山田詠美 (2002) 『Amy Says』新潮文庫
- 山田詠美 (2005) 『ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー』幻
冬舎文庫
- 楊偉 (2007) 「山田詠美の文学世界」『現代女性作家読本⑨山田詠美』
鼎書房、pp.9-17

吉行淳之介・田久保英夫ら(1986)「芥川賞選評」『文藝春秋』、64(3)、
pp.332-337

リービ英雄 (1991)「日本語の勝利 平成の渡来人」『中央公論』
(105)1、 pp.314-324

Okada, Richard (1997)「主体をグローバルに位置づける：山田詠美
を読む」大野雅子訳『日米女性ジャーナル』21、 pp.79-95

Russel, John G. (1991) “Race and Reflexivity: The Black Other in
Contemporary Japanese Mass Media,” *Cultural Anthropology*: 6(1),
pp.416-428.

Said, Edward (1978) *Orientalism*, New York: Georges Borchardt Inc. 今
沢紀子訳(1993)『オリエンタリズム 上』平凡社、